

教祖のひながたをたどり 真実をもってお願いしよう



10月15日、秋季大祭当日の様様



発行所
天理教夕張大教会
〒068-0029
北海道岩見沢市9条西6丁目
☎ 0126-22-1248
FAX 0126-23-7275
yubaridai146@gmail.com

ホームページ
bariten.main.jp



LINE 友達登録
お願いします

貴方への手紙 (320)

人は誰かを幸せにするために生きています。

最近この言葉をあちこちで聞きます。しかし「そんなことないよ。人間は欲のかたまりだ。他人の幸せなど考えるのはよほど暇かアホな人だ」と言う人の気持ちも分かります。

とは言っても実際に人は誰かを幸せにするため仕事をするこゝとによって賃金を得て幸せに暮らします。皆さんがそうしています。だから誰かを幸せにするために生きているという言葉は普通のことです。

人は「感謝されたい。大事な人と思われたい」人が何を望むのか？についてある人が言いました。人が望む究極は「誰かに感謝されたい。大事に思われたい」その気持ちだけなのだそうです。物やお金も何もかもそのためのものなのです。

人に必要とされ感謝され喜ばれることが人間の強い欲求なのです。自分でもそれが分かると他人を優しい目で見えるようになります。

お知らせ

十二月月次祭

12月15日 9時30分開扉献饌

祭典の様様をライブ配信します。

るのではないのでしょうか。自分がそうなら相手も人から感謝されたい大事に思われたいのですから。

教祖が言われた「はたらく」という言葉はよくご存知でしょう。「人間ははたらくために生まれてきた。はたらくとは、はたはたを楽させること」。それは「人は誰かを幸せにするために生まれてきた」という考え方と一致します。人様を幸せにすることで結局は自分が陽気ぐらしをすることが出来ます。

人間はたすけあつて陽気ぐらしをするように生まれてきた。幸せになるために生まれてきた。そして誰かを幸せにするために生まれてきた。なんと素敵な思い方ではないでしょうか。

陽気ぐらしをして親なる神様に喜んでもらう。神様の幸せまで思う？それはとてもない大きな考え方。宇宙的！かもしれない。

神様と人間。親と子が喜びあふれる団らんの世界を生きる。それが陽気ぐらし。本当は誰でもそれができるのが人間。しかし世界はそう成っていない。

天理教の教えには、人をたす

けて我が身たすかる、というたすかり方の根本があります。誰でも幸せになりたいのは当たり前ですが人の幸せを願ってこそ自分が幸せになれるのです。目の前の人に幸せの種を蒔く。やがて根が生え芽が出て茎が伸び花が咲き実がなる。その結果自分が幸せを味わいます。

二人の心を治めるなら素晴らしいことが現れるという意味のお言葉がありますが、二人とは誰か？それは自分と妻、自分と夫、自分と家族、自分と友人、知人、仕事の相手、ご近所等いろいろあり、二人とは人間関係の基本のことと思います。人の悩みの根本は人間関係と言われます。悩む人も多いのですが自分を先に立てず、身近な相手を幸せにしようとするのは結局自分が幸せになれること。相手を幸せにせず自分が幸せになれるなんてあるだろうか？そりゃないでしょう。

人は誰かを幸せにするために生きています。実感できたら最高の幸せです。幸せとは心で感じるもの。幸せだなあとつぶやくもの。今月もお幸せに！

秋季大祭の様

肌寒く小雨ちらつく朝、スト
ーブの準備を整えて、立教に縁
ある秋季大祭は、喜多秀和世話
人先生にご来会頂き、執り行わ
れました。

秋色の野菜、果物などが供え
られる中、通常より30分早い9
時より開扉献饌のち祭文奏上。
その後座りづとめ・十二下りの
てをどりが勇んでつとめられ
た。

大教会長はあいさつで「秋の
大祭、ご参拝ありがとうございます
ました。立教に縁ある大祭、本
来であればみんなで直会をした

只今は当教会の秋季大祭を、
共々に勇んで勤めさせて頂く事
が出来ました。この折に、少し
だけ自分の感じた事を聞いて頂
きたいと思います。

『ソーシャルディスタンス』、今
まで聞きなれない言葉が行き交
っている。感染症が突然去年の
年末に現れ、瞬く間に全世界に
広がって、未だに収束していな
いという状況です。教内の本を
読むと、百年前に『スペイン風

いところですが、叶いませぬ。
心だけは明るくさせてもらいた
いと思います。
本日の祭典もオンライン配信
をしております。入院中の奥さ
んからも『見ています』と連絡
が来ました。遠方の方もそれぞ
れの土地で見られてくれている事と
思います。
先月はYouTubeでひきよせ
大会をさせて頂きました。ご覧
になって頂けたでしょうか。多
くの人にご参加頂きまして、誠
にありがとうございます。会
長として最後のひきよせ大会、
盛大にしたかったです。この
ご時勢、制限がある中で若い人

秋季大祭神殿講話 世話人・喜多秀和先生 コロナ禍の中、今こそ 教祖のひながたを学ぼう

邪」という感染症があり、一回
目の感染時には、割かし死ぬ人
も少なかつたんですけど、二回
目には4000万人〜6000万人
とかそういう方達が亡くなっ
た。ウイルスは突然変異でコロ
ンコ変わる訳です。今回の感染
症も細菌の研究者の話では、既
に十何回かは突然変異で変わっ
ているそうです。その突然変異
が、毒が酷くなる場合があるん
ですよ。今回の突然変異はど
う変わるかという事は神様のみ

達が工夫してくれました。
本日より、来年の六代会長就
任奉告祭の実行委員会をスター
トさせます。奉告祭の日取りは
九月四日、お運びは六月にさせ
て頂こうと思っております。皆さ
んにはそれぞれの立場で様々な
役を担って頂くことになりま
す。どうかお力添えをお願い致
します。」と話された。
喜多先生の講話後には、来年
の奉告祭に向けた実行委員会を
梶川卓一理事（峰延）を委員長
に発足されることが、事務局長
を務める高橋太志役員（祝梅）
より発表された。

がご存知で、人間がやる事は特
効薬の発明、これにみんな期待
している訳です。しかし学者に
よると、薬が効かないような変
異の仕方をする可能性もあると
言うんです。私達の身体の中に
ウイルスに対する抗体が身体の中
に出来ると、どう変わって
もこの抗体が対応してくれるん
ですけれども、それを待つしか
ないんです。
それはただ単に人間が待つて
いるというだけでは、駄目だと
思います。おふでさきに『せか
いにハこれらとゆうていうけれ
ど 月日さんねんしらす事な
り』（十四号22）とあります。明
治時代にコレラの発生が何回か

ありまして、多くの方が亡くな
った。当時はウイルスという存
在が分かりませんでしたから、
神仏の怒りが来たという事で、
鎮める為に色んな儀式をした
と、歴史に残っています。親神
のざんねんがあるから、それを
晴らしてくれ、というのが今
おふでさきですね。このざんね
んを晴らしてくれというのは、
神様の大きな願いであり、思
いであります。
しかし、コロナが必ずしも悪
い事ばかりではない、と実感す
る事があるんです。本部の夕づ
とめが終わわり、帰る時間にな
ると、空が真つ黒になるんです。
ハッと気が付いて見上げた時
に、星が本当に綺麗なんです
よ。本当に天の川が見えるくら
いの、星がバーツと全面にあつ
て、こんな滅多にないんです
よね。燃料をあまり消費しなく
なって、だんだん地球環境も元
に戻りつつあるような気が、自
分の中ではしているんです。
コロナは必ずしも悪い事じゃ
なく、神様のざんねんを知らせ
たい、そのざんねんがどこにあ
るのか。私達お道を信仰してい
る者達は、神様の思いを自ら悟
っていくという事が非常に大事
な部分ではないでしょうか。今
の状況を、簡単に喜んだり憂
いたりするのはなく、神様は何



を思っておられるのか、その辺
に大いに思いを鎮め、悟り、ま
た実行していかなかったら、神
様の思いが全然我々の所に届か
ないという事になります。
私達は人知を超えたところ、
親神様のお働きを待つ為に、ど
う動いたらいいか。思い通りに
ならない悩みを私達に見せられ
るのは、親神様が私達にもっと
成人してほしい、という思いで
あります。親神様の思いを深く
考えますと、元の理の話がまず
浮かびます。何もない泥海の世
界で、人間を作って、陽気ぐら
しをさせ神も一緒に楽しみたい
という話。それは私達と一緒に
で、育ってきた子どもが楽しそ
うにする姿を見るのは、親とし
て本当に嬉しい。ああいう思い
は神様も同じや、と仰るんです
ね。我々が陽気ぐらしをする事
というのは、神様が人間を作っ

た第一目標である、という訳です。

みかぐらうたの五下り目の五ツに『いつまでしんぐくしたとしても やうきづくめであるほどに』とあります。いくら信仰を何十年、何百年したとしても、暗い気持ちで過ごしているのでは、信仰している値打ちがないという事です。私達はやはり、陽気づくめという事を常に心していかねばならないし、実行していかなばならんという事が大事な点なんです。誰だつてスツと思いが到るんですが、陽気づくめが大事やと言いなから、この実行がなかなか難しい。全部自分の思う通りに周りが動いてくれたらと思いますが、人それぞれ心も考え方が違いますから、不足に思う事は常に起こり得る事です。陽気づくめは大事だと分かっているにもかかわらず、このまま放つておいてもコロナの収束はいつまでたつても出来ない。じゃあどうすれば、と親神様が仰つたことを色々と探してみますと、『どのよふなむつかしくなるやまいでも つとめ一ぢよてみなたすかるで』（十号20）とあります。どんな病気であっても、おつとめによって助かるんだ、という事です。明治時代の方達は、本当に死にかけている人達の枕元でおつとめをする



事で、見事にご守護頂く事があちこちで起こつた訳です。そういう事から、私達の先祖が入信していったのであり、やはりおつとめが大事であると気が付くんですよね。

このおつとめも、ただ単にお手ふりをしたり鳴物を鳴らすだけではいけない、と教えて頂いてるんです。「助かりたい助かりたい」だけでは、助けられん。こつちからないものねだりをするだけの事ですからね、それでは助からん。価を持つて実を買う、と教えて頂いております。人間が神様の思いに応える、真実を出す事によって、親神様も私達の願いを聞いて下さる。つまり、私達は真実を用意しなければいかに、という事です。ただ単にお願ひするだけでなく、真実を持つてお願ひする事で神様が願ひを聞き届けて下さる。とすれば、私達は何をすればいいか。水垢離を取つて、重病の方におさづけをするだけ

真実ではないですよ。『ひながたの道を通らねばひながた要らん。』（明22。11。7）とあります。教祖のひながたは教祖伝にも逸話篇にも多く書き記されています。言葉の使い方、行動の仕方、笑顔の出し方、挨拶の仕方、そういう事があちこちにお道の教えに残っている訳です。教祖のひながたをいかに真似して、自分の中に取り込むことが出来るか、という事が、今私達お互いが親神様に試されている事だと思ふんです。形だけの御利益信心、自分の望みを叶えた、というような人はそこで終わってしまうと思ふんですよ。そうじゃなくて、深く感謝して、教祖の思いに応えるように、ひながたを実践していく事を、今求められているような気がするんです。

神様は、訳の分からん人にまですろ、とは仰つてない。よろづよ八首に『しらぬがむりてハないわいな』と書いてあるでしょう。しかし天理教の信仰をしている私達お互いは、神様からその話を聞いているんです。聞いていて、分かっているんですけども、しない。これはもう神様のざんねんという思いが出てくる事ですから、私達がひながたを実践できるかどうかを、神様が今見ている、という風に私は悟りました。

いかに日々の中でひながたを実践するか。ひながたというのは、難しい事じゃないんですよ。『おいしい、おいしい、とやうて食べてやつておくれ』という逸話がありますね。生き物の命を頂く、という慎みの心です。その自覚の元に『おいしい、おいしい』と言つて食べてあげると、食べられる方も喜びますし、段々出世して人間に近こうなつてくる、という話もあります。教えて頂いたら、本当に朝夕食べる時に言っているか、という事を自己反省するわけですよ。今のは一例ですが、ひながたを実行できているのかと意識する事が、おつとめをする我々に真実があるかどうかという、大事な部分であると思ひます。それぞれの教会で、朝夕のおつとめをなさっていると思ひます。それとは別に、コロナのいち早い収束や、感染者のご守護、そしてそれぞれのおたすけ先のご守護を願う、お願ひづとめ、これを大いにやつて頂きたい。

昨今の情勢で、感染症予防の観点から、距離を取る事の大事さを、私も大いに学びました。この、適度に距離を取る、というのが大事なんです。前真柱様のお話で、リレーの競技でバトンタッチする時に、両方が走っているというのが大事な方、両者のスピードが合った時にバトンを渡す事で、ロスなくスムーズなバトンタッチが出来る、という事です。この距離とスピードとタイミングが微妙なのが、これからの一年間なんです。今の会長さんが全力疾走して後継者が追い付けない、これではいけない。かといってゆっくり待つていても、これは口スが多い。近すぎず遠すぎずの距離、これはお二人にとつて大事な事であり、皆さんにとつても大事な事なんです。これから一年の間に、あつちでもこつちでも、若い人へチェンジしていかなければならない。

私が見るに、夕張という教会は、上手にあがいておられる。コロナで身動きが取れない中、何とかして皆を勇ませよう、とこちらの会長さんは腐心してらっしゃる。このあがく、という事が神様へ思いが届く事に繋がるのではないかな、と思ひます。諦めるのではなくて、あがいてみる、努力してみる事で、次へのバトンタッチがしやすくなるんじゃないかと思ふんです。年寄りも若い人も全力でこの一年間走りながら会長就任を迎えられたら、新しい夕張大教会が誕生すると思ひます。

子ども食堂に市内の中学生から取材

10月22日午前、岩見沢市内の明成中学校生徒4人が夕張大教会を訪問した。班ごとに岩見沢市内の各所を訪ねて市民の暮らしを学ぶ授業の一環であるとか。市内初の子ども食堂に関心を持ったようで、主催者の美重子奥さんは入院中だったが大教会長や美由紀奥さん、日頃お手伝いして下さっている市内のご婦人と共に訪問を受け、生徒たち

青年会外回りひのきしん

青年会では、今年のコロナ禍以降ほぼすべての行事が中止又は延期となる中で、春より毎月、薪割り、草刈り、庭の整備等、大教会外回りを中心にひのきしんに励んでいる。この11月1日にも、9名の青年会員が集まり、敷地内や歩道に溜まった落ち葉集め、庭木の雪囲いなど勇んで行った。

冬は大掃除、屋根の雪下ろし等、お願いします！



の質問を受けた。



YouTubeの陽気チャンネルで、大教会長さんのお話が視聴できます。(13分程)お話のタイトルは「頑張らなくていい」です。大教会HPでも見れますので是非ご覧ください。第2弾も配信予定です。



月次祭配信ページ



LINE友達登録



暮らしと信仰

モノの生命

先日、庭の樹を切ってくれとの依頼で五十年ものの楓の伐採に出かけた。直径40〜50センチで木質が硬いので、うちのチェーンソーでは最太でないかと思われた。

そのお宅の奥さんは一人暮らしで、70歳を越してまだお仕事をされているようだが、庭木の剪定と冬囲いが大仕事で大変になったので、切ろうと決めたのだと言う。その樹は「新婚旅行に主人と本州に行った時、頂いた幼木なの」と記念の樹を切る事に少し寂しそう。それが「切った後に、うちの裏で乾燥させて、薪にして燃やしますから」と言う。それは良かった、最後に生かしてくれるのはありがたいと言った。

しかし、いざ切る時になると見ていられなくなつて、出かけてしまった。

教祖の逸話篇に『物は大切に』という、紙縋りで網袋を作ってお話がある。『物は大切に』なされや。生かして使いなされや。すべてが神様からのお与えものやで』と言われている。モノを経済効率や利用する簡便だけで計るのではなく、手間が掛かるうともモノの生命を最後まで

で生かす事の大切さは、神様からのお与えという物差しで考える事が必要なのだと思わされた。(ま)

庶務部 10月

- ▽をびや 1件
- ▽三日講習会・宿舍掛
- 齊藤 智明(南幌) 10・16〜18
- ▽詰所教養掛
- 10月 藤崎 勇(旭都)
- 11〜12月 梶川創一郎(新生生)
- ▽詰所ひのきしん
- 梶川 芳史(新生生) 10・20

大教会日誌抄10月

- 1日 たすけ推進会議
- 青年会・客間庭整備
- 会長夫妻、函館へ
- 4日 栗山・瀧野宅年祭
- 7日 会長、旭都分大祭
- 8日 会長、峰延分大祭
- 10日 会長、祝梅分大祭
- 大和さん、北夕分大祭
- 13日 婦人会・客間清掃
- 14日 大祭準備
- 15日 秋季大祭
- 喜多秀和世話人先生ご講話
- 18日 会長、栗山分大祭
- 22日 会長、おちばへ
- 23日 婦人会・布団整理
- 24日 会長、本部神殿当番
- 26日 本部秋季大祭
- 遥拝式
- 27日 会長、かなめ会、帰会